

手が6本ある生活

村上美樹



はじめに

フベンの住んでいる場所に行って交流を深めたいと思い始めたのは去年の春先のことだった。2021年の夏、私の大学での勤務が落ち着いた頃に2週間ほど滞在しようと考えていた。その後、途端に展覧会とレジデンスの予定が2つ決まってしまう、夏に滞在しに行くのを断念した。次の冬に行くと約束をする。

フベンは毛利愛実子（以下あみこ）と中川亮二（以下りょうじ）のやっている行商ユニットで、生活の中での陶器と彫刻のあり方を考えるアーティストとして活動している。あみこの作る陶器はごつごつしていて、不思議な形をしていて、食器としては重ねづらい。しかし実際に持ってみると愛らしく、手のなかで優しく収まる柔らかな指感触がある。りょうじの作る木彫の什器や彫刻は実際にインテリアとして使うとなると重く、無骨だ。「大切なもの（たとえば庭採れ野菜）は少し高いところに置いておきたくなる。」* 彫り跡から宿る謎のかたちは、神具や祭具にある、人間にとって便利な機能を持たないことと少し似ている。

* フベンの instagram (@fuben_paddling) から一文を引用

私は二人の生活を（SNS で）はたから見ていて、そこに豊かさを感じた。そこで起こる生活を見てみたい、という興味の気持ちと、フベンを自分の「持ち物」として欲しいと思う気持ちが湧き上がった。ここで言う「持ち物」とは"物質としてフベンの作品が欲しい"と思う気持ちではなく、いや、もちろん欲しいので買おうと考えているが、そうではなく、"気持ちを持つ"「持ち物」。関係性としての「持ち物」で、どこに行ってもフベンを持ちたい、そう思った。いずれ私が遠くに行っても、フベんに、自分の住まう土地で出会いたかった。そうして滞在の計画を練っていく。2月15日～26日までフベンと一緒に共同生活をする。

せっかくなのだから展覧会をすることにした。4月2日から1週間。場所は京都市、VOU/ 棒の3階で行う。この滞りで一緒に作ったものや、売りたいもの、見せたいもの、見せたいけど売りたいものを一緒に考えて、展示空間に持って行こうと思っている。

2022年2月14日





2021年10月25日

青森でのレジデンスが決まり、^{かなやまやき}金山焼の窯元で滞り制作中の工藤玲那さんと出会う。

工藤さんは私と同じ1994年生まれで、生活の苦しさを共有した。

アーティストとして生きることは本当に上手くしないと生きづらい。

お金がないから働いて、生きるための食材と同じように制作するための材料費を稼ぎ、買い、作る。やめてしまえば楽になるとか、そういうことでもなく、やっぱり作ってしまうので、作りたいので、いくら苦しかろうが、続けてしまう。自分が思う豊かな気持ちを保ったままやめることができるのなら、それはそれでいい。

工藤さんとはどんな助成金があるとか、何をしたいと思っているとか、これから作りたいもの、知りたいことをお互いに言い合った。工藤さんとお会いして本当に良かった。また会いたい。

11月23日

ふと、VOUで展示をしたいと思いついた。

工藤さんがそういえば4月にVOUで展示するとも伺っていたので、会期を被らせたいとも思いついた。理由はすごく純粋に、同世代の人の作品が同じ場所にある状況で生きていることをみんなと共有したくなったから。

ここは考えづらい文章なので、少し置いておこう。

2022年2月14日

昨日は勤めている大学で卒業制作展の搬出だった。レンタカーは昨日の昼間に済ませて、少しずつ自分の用事を終わらせていく。

明日鳥取に行くというのに準備を全くしていない。明日やろう、そう思って床に就いた。

2月15日

朝8時起床

全然旅の準備をしていないのであわてて用意をする。

服はありっただけ用意した。寒いと聞いていたし、フベンとオンラインミーティングしている時2人の喋る息が白かったから、そういう家なんだと覚悟した。

道中、高速道路ではうさぎっぽい生き物が道端で死んでいた。鷹も^ひ轢かれていた。そして私は何らかの鳥っぽい生き物を車の左端で轢いてしまった感覚があった。轢いてしまった瞬間、「今日は鶏肉を食べるのをやめよう」そう思ったのはなぜだろう。

フベンの住む地域、白石^{しらし}まで行く途中、湯梨浜町^{ゆりはまちょう}に入ったあたりで温泉郷を3つ見かけた。温泉に入りたいと思いながらフベン宅へ向かう。

少し迷いながらも到着すると、作業場にりょうじがいた。

「ヤッホ〜おひさしぶりっす〜」

車の運転で少し迷ったこともあって返事を返せなかった。

とにかく無事に着いて良かった。

ゆっくりお話をしたあとに温泉に入りに行った。

<はわい温泉 湯〜タウン>

もともと市民プールだったようで、空間の半分に壁を立て、男湯と女湯で分けられている。湯けむりの中に置いてある観葉植物がすごく映えていて南国を感じる。

晩ごはん

とこさ地方のサバリー（もっちゃりもっちゃりカレー）

豆のカレーだったのだが、口の中に豆が付きまとして咀嚼するのに苦労した。
「このカレー、もっちゃりもっちゃりやなあ！」とあみこが言う。

フベンの家は本当に寒かった。

あみこが用意してくれた湯たんぽを布団の中に入れて寝る。少し暑かった。

2月16日

朝8時起床。あみこがパンケーキを作ってくれた。

焼いている間にりょうじがパンケーキを薪ストーブの中に落としてしまった。

3枚焼いていたのに、2枚になった。

パンケーキを小さく切って、バターとあみこの作ったつぶあんこと一緒に食べる。

朝10時からたみの解体に行こうと言われ、解体についていく。

朝ごはん

消えた1匹パンケーキ～あんこを添えて～

たみは一度来たことがあったので、解体をしている風景を見て少し驚いた。

というか、鳥取滞在2日目にしてまさかたみの解体に行くとは思ってもしなかった。あみこはすごいパワーでハンマーを振り回した。私は常に仕事の最中は疲れないように頭を使って重いものを運んだりする癖がついているので、あみこや、三宅さんのようにアグレッシブに解体をする姿を見て不安になりつつも、向こう見ずな動き方に感心した。

お昼はジャタニさんが作ってくれた。魯肉飯と揚げ餅、フライドポテト、炒めた菊芋、漬物、レタス。すべて美味しかった。

昼ごはん

ジャタニさんのいらっしやいまプレート

たみからフベン宅に戻ったあと、^{かおる}薫さんと18時から食事の約束をしているので、薫さんの結婚祝いにフベン宅の裏山でお花を探しに行った。全然花は咲いていなかった。緑色のブーケができる。解体作業で汚くなったので温泉に浸かる。気持ちよかった。倉吉に来たので、とフベンたちに山陰民具に連れて行ってもらう。すごくたくさん高価な陶器が並んでいた。夜は薫さんと食事をした。薫さんに会うのは2020年9月ぶり。あぜくらというお料理屋さんに入った。ごはん全部が美味しく感動した。

^{しんまきゅうし}鍼灸師のヤブさんと学芸員のマホさんとも一緒に食事をする。

あみこはごはんが美味しくっていっぱい食べて幸せそうだった。

晩ごはん

ハピネス







2月17日

昨日の夕方入った^{とうこえん}東湖園でおばあちゃんたちが「今晚から雪が30cm降る」と言っていた。本当にその通りで、朝起きたら雪が猛烈に積もっていた。白石は40cmくらい積もったのだろうか。白い風景をかなりひさしぶりに見て少し体に力が入る。寒いぞこりゃ。

朝ごはん

パタールに乗せたサバリー

りょうじは雪をかかないと仕事に行けないためみんなで雪をかいた。

「ねえ、なんか板ないの？」

「板？なんで？」

「スコップだと雪がスコップに張り付いて重たい」と言うときがアルミ製のスコップを手渡してくる。

雪かきをしつつ少し時間がたったあとにあみこが「たしかに板でかくのが早いかもしれん」と言い出す。「そうそう、トンボみたいな何かないの？」と聞くとりょうじがなにやらミツマタになった構造体を出してくる。「ああ、それに板つけようよ」と言うとりょうじは早速作業に取り掛かった。しばらくしてフベンの雪かき道具が完成する。

名前は「トンボ」。

トンボを作ってわいわいしたあとに近所の集落の人たちが雪かきを応援しに来てくれた。

りょうじの車は無事に脱出した。あっという間にお昼になったのでお昼ごはんの時間だ。

あみこ特製のリゾットにしようという話になった。りょうじ曰くあみこの作るリゾットは美味しいらしい。「へえ、牛乳入れるの？」と聞くと、あみこは「ノンノン！」と否定した。「チーズは？」と聞くと「ノンノンノン！」と返される。あみこはテキパキと作り、最後仕上げの時に冷凍庫からミックスチーズを取り出してズバパッと入れた。

チーズ入れるやん。。すごく満腹になった。

昼ごはん

ブモンジュリゾット

フベンは田んぼ会議のために家を出る。

私はフベンが不在の間、物書きを進める。こたつの中で。

下半身は暖かいが、指先は寒い。指先がかじかんで筆が進まない。

寒すぎて、ひゅうと風が吹いている先を見てみると障子に穴があいていた。穴の開いた障子の1マスに持ってきた布を障子の寸法通りに切って、貼る。

思いのほか物書きが進まない中、フベンたちが家に戻ってきた。

戻ってくるタイミングで薪ストーブに火をつけたのですぐに料理に取りかかることができた。

フベンたちの作ったお米をそのままの白いご飯で食べたいという私のリクエストに合わせて、おかずを用意した。今夜の品数は多かった。大根餅（私は初めて食べたのだが、台湾で作られる料理らしい。）、菜花のペペロンチーノ、味噌汁。

料理は薪ストーブで火を起こして作る。ストーブの上蓋が開いたままだと^{すす}煤が家の中に広がってくるので、サツと鍋や湯たんぽなどで蓋をしないといけない。早く仕上げたい場合は薪の火力が強い方に鍋やフライパンを移動したりする。

それをここ数日の共同生活でフベンの暮らしのルーティンや、当たり前になっている生活の営みを理解してきた。両手で鍋を持つと手が足りないので、声をかける。「味噌汁引き上げよう」「フライパン移動させたい」「じゃあお湯を沸かそう」ちょうど6つの手が薪ストーブの上で行き交った時、ハッと気付いた。

興奮して「手が6本、テガロッポン！」と叫ぶ。

2人の家に上がり込んで、フベンはなんだか嬉しそうだった。いつも2人で営んでいる生活に、私という手が入ってきたことによって料理の品数を一個増やすことができる。私は家を借りているのだから少しでも手伝いたいと思いながら生活していた。（働かざるもの食うべからずとはこういうことだ、と思いながら）

りょうじは作った米に自信がなさそうだった。

でも、さっぱりしていて美味しい米だった。

晩ごはん

思ったよりだいぶお腹いっぱいになったご飯

晩は少し展覧会の内容を決めた。デザインはまだ決まってないが、やりたいことを少しずつ話し合っている。展覧会会期中にごはんを作ろうという話になった。

「料理を人に振る舞うのはすごく緊張する」とあみこは言う。

「でもミミちゃんに作るときは緊張しない。」

少し考えて、あみこの言っていることを理解した。

「じゃあ、振る舞わず、自分たちのためだけに料理しよっか。」

自分たちのためにごはんを作れば緊張しない。

私たちはこの日常を展示会場に持っていくことにした。







2月18日

朝起きるとりょうじが昨日薫さんに教えてもらったパンケーキの作り方でタネを仕込んでいた。牛乳・生クリームは買っていないので全て水にしたらしい。シャバシャバなタネができる。

朝ごはん
ピピタパン

朝りょうじはたみの仕込みで早めに出かけた。
家の前を見てみると除雪されていて、私のレンタカーもすぐ通れそうだった。
フベンの飼っている猫、ミミの抜糸に行くためにあみこと病院へ行く。
二人はなにやら補助金を取ろうとしていて、法務局にも行った。
思ったよりりょうじの用事が早く済んだのでホームセンターいなくて合流。
フベンが推していたカフェ、sept に行ってランチをした。

昼ごはん
セットのよくばりランチ

昼ごはんを済ませるとりょうじは役場に向かった。私たちは先に戻り、フベンの家のまわりで粘土を探した。粘土と言っても、完璧な陶土が採れるわけではない。粘質のある土を探して、素手で土を触り確かめて採取した。
採取している最中、イタドリを見つける。イタドリは、私が青森滞在中にリサーチした熊笛を作るために必要な資材である。イタドリを何本か折って持って帰る。
りょうじが家に戻ってきて、補助金の用事を済ませ、フベンの二人はりょうじの持っている仕事に取り掛かった。私は採取した土を粘土にする作業をした。
洗濯をしたかったのでコインランドリーへ行く。その間に温泉に行き体を温める。
フベンの家はお風呂を使わない。
二日ぶりのお風呂に感動した。温泉のありがたみが120%アップする。
フベンと一緒に会話をしているとなくともいいものを排除する姿勢を感じる。
あったらいいなはたくさんある。数え切れないほど。でも、自分たちの生活の中で、手に届く範囲で、別になくともいいものもあるんだな、と気付かされる。あるものを気軽に代用できたり、あってほしいものを創作できるのはフベンの強みだ。
今年はなくともいいものを見つけていこう、そう思った。
でもやっぱり、お風呂は毎日入りたい。
家に帰ると21時を回っていて、お腹が空いた中でごはんをたらふく食べたので、りょうじはいつの間にかお布団に入って寝ていた。

晩ごはん
タグスタンのスルマ

パンケーキの中にベーキングパウダーを入れない方法として、一晩できあがったパンケーキの生地と一緒に寝て生地を発酵させる方法があるらしい。パンケーキの生地と一緒に寝ることになる。抱いていてもなんだかよくわからなかったのですが、お腹の近くに湯たんぽを置いて、その隣に生地を置いて寝ることにした。







2月19日

8時30分起床

りょうじは早めに寝たので7時30分には起きていたらしく、遅起きの私とあみこを見かねて起こしにやって来た。「パンケーキ、発酵した？」と聞かれ、布団の中で温めていたパンケーキを吐き捨てるように出す。私は朝が苦手だ。

朝ごはん

一緒に寝たね、パンケーキ

パンケーキは発酵しているかわからないし、変な膨らみ方をしてしたが、ふつうに美味しかった。朝ごはんのあと、りょうじとあみこは仕事、私は裏山の粘土をこねた。粘土が仕上がったので明日以降は何か一握りのものを作ろうと思っている。

11時50分頃出発。気になっていたラーメン屋さんホット・エアへ。塩ラーメンが人気らしいが、他のラーメンもスープをすすると美味しかった。鶏油を買った。ラーメンが大好きな山中のみんなにプレゼントしようと思う。

昼ごはん

淡麗鶏ラーメン ホットエア

青谷で紙すき体験、紙をすいた後色紙を置いて貼り絵をする。私は体験をした人が捨てていたちぎった後の色紙をわさっと取り、適当に置いてみたらポートレートに見えたのであみこを作ることにした。あみこは穴のあいた障子に貼れる可愛いテクスタイルを作った。りょうじは白い和紙に白い和紙を貼り付けていた。

鹿野で鹿野芸術祭関連企画の展示を見る。

地域に根ざしている広々とした企画だと思った。

道の駅で今晚の三宅さんごはん会の買い出し。ねばりっこという長芋が有名らしい。

フベン宅に戻ると速攻火を焚いて料理に取り掛かった。料理は一切味見をしていない。

三宅さんの家に着いてから盛り付けをしている時にあみこはずっと笑っていた。家での調理があまりにも面白すぎて、思い出し笑いが止まらなかった。
ごはんを食べている最中は、なぜかフベンの生計の立て方の話を聞いた。私の置かれている状況だと願っても叶わないことだと思った。

晩ごはん

アジア地方の相談会

ごはんを食べて食器を洗いながら広報についてどうするか考えた。
りょうじは潔癖症らしい。ここで言う潔癖というのは、汚いことを嫌うという意味ではなくて、嫌だったから近づくことができなかつたとか、少しでも違和感があると立ち止まり、考える。そう言う意味での潔癖。今日和紙の紙すき体験に行ったのはフライヤーなどの広報に使う紙を自分たちで作るためだと思っていたが、りょうじはそこからデザイナーを雇ってフライヤーデザインしてもらうことを疑問視して、話が進まなかつた。三宅さんができるようであればお願いしたかったが、三宅さんには断られる。話だけ聞いてもらった。

あまりにも悩むので「じゃあ、フライヤーつくるのやめる？」と聞くと「ああ、良いね、それぞれ！」と、りょうじが納得した。

フライヤーを作らないことにする。助成金に関わっているため変更届が必要だが、そこはどうかかなと思うので、これからゆっくり話し合おうと思う。
フライヤーを作らないということは、広報する術を上手く考えないといけない。
展示タイトルは決まっていないが、「棒が3つで手は6本」が好きだ。
三宅さんは家のリビングで横になりながら私たちの相談を聞いた。「僕の方が本音出やすいんだよね」と言っていた。
りょうじは「三宅さんのおかげで話し合いが進んだ」と喜んでいて。
あみこは「あ！トライアングルやん！」と言いつす。
楽器のトライアングルは三角形の形をしているが1つの角はあいていて、棒を叩き、振動することで音が鳴り響く。私とフベンの3人と叩く棒の三宅さん。

今考えるとちょっとよくわからないので深く考えたいが、「トライアングル」というパッケージイメージとしての取り扱いだと認識する。

三宅さんの家で、3人で勝手に話し合いをしているとき、あみこはずっとティッシュを細かくちぎっては投げていた。小さなティッシュの集合体はどんどんと増え、広がっていく。「なんなんこれ」と聞くと「こうしてないと人の話聞けへんねん」とあみこは言う。三宅さんはちねり続けるあみこを見てニヤニヤしていた。

そういえば、フベンの家にはティッシュが無い。その代わりに「鼻かみ」と呼ばれる小さく切った手ぬぐいが置かれている。鼻かみは使い捨てではなく、洗って再利用できる。





2月20日

昨日は湯たんぽを用意せずに寝たので、自分の体温だけで布団を温めた。朝は非常に寒い。雪も降り始めてきた。震えていたら、あみこに「ミミちゃんが風邪をひいたらどうしよう」と言われる。

それは、どうしよう。。顔を洗って鏡を見ると鼻から口にかけてほうれい線のようなシワがくっきりと出ていた。あまりにもはっきりと出すぎていて少し引いた。

朝ごはん

焼き菓子店 はこぶねのマフィン

りょうじは午前中たみの仕事をしていた。あみこは薪ストーブの灰を掃除していた。私はこたつで物書きをする。あみこは掃除を終えると「うー、さみー」と言いながらこたつに入ってきた。お昼まで時間があるので、昨日仕込んだ粘土を持ち出してこたつ陶芸することにした。

「贅沢やなあ、なんかカフェみたいや。」あみこは粘土を触ることはコーヒーを飲んでゆっくりすることと一緒に考えているらしい。良いことだ。

りょうじが帰ってくる。薪ストーブを焚いて昼ごはんにすることにした。今日はパスタ。かぶとネギをにんにくで炒めて、牛乳でとろみをつける。

昼ごはん

白い恋人パスタ

午後から鳥取県立美術館開設関連イベントトークを聞くため倉吉パープルタウンに行く。通称パターン。鳥取県立美術館学芸員の赤井あずみさんと社会学者の渡辺太さんとのトークを聞く。渡辺太さんの変遷はすごく面白かった。

私が関西に住み始めたのは2013年から、渡辺さんらが大阪で広く活動していた時期からだいぶ外れているため、大阪の芸術活動の変遷を全く知らなかった。

トークを終え帰ろうとしたところ、赤井さんと目が合う。

初対面のためなんと言葉を言って良いかわからなかったが、フベンの二人は知り合いのようだったので、「今鳥取滞在中で、二人の家で暮らしています。」と切り出す。「ああ、そうだったのね。二人はいつもトークを聞きに来てくれるの。」

赤井さんと少しお話をする。ジャタニさんと渡辺太さんは大阪で活動していた時からの知り合いだったようで、渡辺さんが鳥取短期大学で先生になった経緯が熱いという話をした。赤井さんとジャタニさんも昔からの友人のようで、ジャタニさんをたんぼぼだと例える。「彼女はたんぼぼみたいに種を植えつける」と。

なるほど、ジャタニさんは種を運ぶ人なんだ。

昨日三宅さんの家で話していた冊子の制作について、冊子制作の見通しがなかったので汽水空港でZINEのリサーチをしに行く。たまたま、赤井さんも汽水空港に来た。珈琲を飲みながら取り置きした本を買っていた。

本を見てしばらくしてりょうじは赤井さんに相談を切り出す。

「どんな冊子を作ればいいのか全然見えてこない。」

りょうじは自分の悩みを言葉にできるようになっていた。

もしくは、大学院時代、私がそういうりょうじの姿を見ていなかったかもしれない。

「紙切れが1枚だけだったとしても、冊子はあったほうが絶対にいい、やったら良いじゃない。」と赤井さんがアドバイスをしてくれる。汽水空港のモリさんは「本棚に置ける本にしてほしい。」と言う。これらのアドバイスで少しでも納得できたのだろうか。

りょうじの顔を伺った。まだ悩んでいた。

待ちに待った温泉に入りに行く。心の中に少しずつ違和感の小さな塊が増えていっているみたいで、考え事を3つほどした。昨日のごはん会について、冊子のこと、共同制作のこと。少しずつ意識のズレを感じている。それについて、なんと伝えればいいのか。言葉が出てこない。あみこは「うちはうちで本作ることにするわ」と言う。フベン宅に帰宅すると、あみこは鳥取に住んで3ヶ月経った頃に作った本を見せてくれる。それはたった1冊だけ、本のようにまとめられている形の、絵や日記や料理のレシピが書いてあるZINEだった。

今晚は私が得意だと言っている（得意かどうかは不明だが、それなりに美味しい）麻婆豆腐をつくることにする。付け合わせにピーマンと菊芋を鶏ガラスープの素で炒めた。

晩ごはん

村さんのごちそう

たらふくご飯を食べてすごく満足した。

りょうじが「映画を観よう」と言い出す。

ジャタニさんから借りた『ほんがら』という滋賀県近江八幡にある島町しまちょうの集落で無くなりそうになった祭事についてのドキュメンタリーだった。

こたつの中で観始めるも、りょうじは開始5分でこたつの中で寝始めた。

夜遅くに映画を観るため、そんなに乗り気じゃなかったのだが、おじいちゃんおばあちゃんのインタビューを見て私とあみこはワクワクし始めた。

おじいちゃんおばあちゃんたちがあまりにも可愛くて、癒された。町の中の高齢化が進んで、本来若者が主導となって動く祭事が無くなりそうになっている。

「白石より世帯数多いのに、大変やなあ」

ドキュメンタリーの中で取り上げられている島町の世帯数は80戸、フベンが住んでいる白石の世帯数は25戸。白石でもコロナもあって無くなりそうな祭事はあるが、若い人たちは祭事に積極的に参加するらしい。

ドキュメンタリーでは、町内にいる若者に祭事に参加してくれと、30歳手前の住民が若い世代の住む家を伺ってお願いしているところでDVDは再生が止まった。

なにやらDVDに傷がいつているようだった。それより先を再生することができなかったので、結局最後まで見れず、寝に入った。







2月21日

朝はジャタニさんの家でパンケーキを食べる約束をしていた。

パンケーキの作り方を教わった。

あみこりょうじはベーキングパウダーを適量分入れていないことが判明した。理由としては「計量器が信じられない」という謎の理由だった。ベーキングパウダーを入れても入れても計量器が1gを認知してくれないらしい。「少ない数字は計量器が認知しないイメージがある。」と言いつつ、「イメージの話やろ！」とジャタニさんにつっこまれる。黙々と作っている中にも理不尽な判断や自信があることに気づかされる。物理を信じよう。

朝ごはん

ジャタニさんのパンケーキ

ゆっくりパンケーキを焼いたので12時までジャタニさんとお話した。

ジャタニさんが悩んでいる頃に出会った人の話を聞いた。(名前は忘れたが、小説を書いている人だった。) その人に悩みを話すと、「50までは好きなこととしていいんやで、50歳から考え始めたらいい。」と言われて、「あ、そうなんやー50まで好きなこととしてええんや！」となり、道が拓けて行った。と聞く。

そうして生きている、そう話しているジャタニさんはなんだか輝いて見えた。

お昼ごはんはゆっくりご飯を食べたので無しにして、りょうじとあみこは仕事を始める。

ここまで、ずっとりょうじの「仕事」と言っではっきりと説明していなかったが、りょうじはアーティストからの依頼仕事で什器を制作している。パータンのフードコートに置く移動型什器を作っている。滞在前に「ミミちゃん来る前に終わらせる」と言っていたものが伸びに伸びて私の滞在中に丸かぶりしている。24日に納品らしい。あみこはりょうじのお手伝い。

りょうじが熊笛を作りたいと言うので、熊笛で遊ぶことにした。音階が作れるかもしれないと思って穴を開けてみたがうまくいかなかった。横笛にしたらうまくいとも思っ
て横笛にしてみたが、それもうまくいかなかった。失敗したイタドリがもったいないので、
組み合わせて構造物を作る。

夜はジグシアターという映画館をしているフカさん家族がフベン宅に来た。

フカさんとミーナッツがカレーを作りすぎたようで、分けに来てくれた。米はあみこが
ターメリックライスにしてくれた。

晩ごはん

フカさんとミーナッツのカレー

フカさんの子供が本当にすごかった。元気すぎて、ビビった。黙って別の部屋に移動し
ようかと思うくらい元気だった。りょうじはフカさんにも私が滞在している今のこと
について説明した。その説明を聞いているとき、自分は共同制作をするつもりでここ
に来たのではないと気付く。いや、やりたくなったらしくなくていい。なんと言うのか、
これも言葉に詰まる。

フカさんに「りょうじとあみこは変わった？」と聞かれる。

変わったのかな、そうだな、変わったと思う。

特にあみこは大阪から鳥取に移って初めて家族のところから離れているのだから。私
がフベンの家に訪れて最初にびっくりしたことは里芋の皮を炒めることだった。

みんなが捨てているであろうものを食べる姿勢はなにやら強い思想があるのだと思
っていた。あとお風呂に毎日入らないことや、頭を洗うときにクエン酸で洗うこと、石
鹸にも気を遣っているし、小豆を発酵させて甘くさせたりしていることも。これをなん
と言うのかわからないが、なんかの思想だと思った。(ビーガンとかそう言う、何か。)

そういえば、りょうじは汽水空港のモリさんに「りょうじはスピらずにスピってるよ」
と言われたらしい。(スピとはスピリチュアルの略)マルセケのお兄さんには「君たちパー
カルっしょ」と言われたらしい。(パーカルはパーマネントカルチャーの略)

フベンたちの言う「なくてもいい」の取捨選択に対して、私は勝手になんらかの思想だ
とは思っていたが、その二人の生活の”思想らしさ”に対して嫌悪感を抱くことはな
かった。家庭の中のルールには理由がある。二人の家に転がり込んだ私は、新しい民
族の生活をドキュメントするかのように、存在を馴染ませた感覚がある。

フカさん家族が帰った後に疲れたので深く眠りについた。

寝ばけ眼で、そして眠りながら、ゆっくり考えごとをする。



考えていること、違和感について

りょうじは湯梨浜町に住む知り合い達に私の説明をする時、「滞在制作」や「レジデンス」という言葉を使うが、私はそこに違和感を感じていた。そうではない、その認識ではないと思いつつ、提示できる自分の存在についての説明は考えても出てこなかった。

そもそも私はフベンの生き方について気になっていた。

現状の私は、京都に住み、美術大学で働きつつ美術展覧会の搬入や依頼物の制作をして生きている。なぜかお金は貯まらない。生活費を稼ぐのに必死で、日々の制作がなおざりになっていた。

そんな中、SNSを通してフベンの制作や生活を見て、漠然と「豊かそうだ」と思った。フベンはどのタイミングで作りたい気持ちになり、作り始めているのか、滞在期間中に共同生活することで日々作ることのモチベーションの保ち方を知りたかった。だからこの鳥取滞在は私にとってアーティストインレジデンスでもなく、鳥取滞在制作でもなかった。作品制作のためのリサーチでもない。何にも当てはめたくなかった。

ケツのない中での制作や、じんわりと湧く創作意欲にこの先の光りを感じていた。

なんか違う、やりたくない、でもこれはしたい。

フベンの生活のように選び取る、取捨選択の中で生まれた作品こそ、作品たらしめると強く主張したい。作れないなら、作らなくて良い。悪いことなんて全くしていない。むしろ無理に作るからこそ、。





2月22日

9時起床。かなりゆっくり寝た。

疲れているのだろうか。

あみこが「計量器で測りながら入れたけど、ベイパー（ベーキングパウダー）がたくさん入っちゃった。」と言う。「もっとゆっくり入れなきゃいけないよ」と返事を返す。

朝ごはん

セイコウバンケーキ

午前中はフベンとしてテレビの取材があると言っていたので、私は電波の届くところで日記を書くことにした。ついでに洗濯物もコインランドリーで洗濯した。最高のオフィスを発見した。フベン宅はどうしても寒いので指先が凍えてキーボードを打つのが遅くなるが、車の中だったらあったかい暖房をつけて快適なソファの上で文字を打つことができる。環境問題的に良くないのだけれど、できるかぎり自分にとってストレスフリーな環境じゃないと作ることができない体になっていた。

取材が終わったようなのでフベン宅に戻り、取材ではなんと聞かれたのかを聞いた。

「移住してきて良かったところと悪いところは？」

あみこの良いことは「四季があること」、悪いところは「無い」

りょうじの良いことは「季節が楽しめること」、悪いところは「移動手段が車しかないから、（車も、体も）動けなくなった時の移動手段が無くなること。」

簡素な応答はなんら求めていなかったが、その話を起点に聞きたいことを聞ききっかけになった。りょうじとあみこは最近この家を買った。

「鳥取でずっと暮らそうと思って移住してきたの？」

二人ともそんなつもりで来たわけではなかったという。フベンの住む家の付近は土砂災害危険地区で、土砂崩れが心配だったという。

「去年の夏頃雨が降り続いたときに、さすがにやばいから逃げようと思って、インパクトと丸ノコと飼っている亀を持って逃げた」とりょうじは言った。あみこは起きてなにも用意せずに家を出たらしい。緊急事態の時に動く行動について考えさせられる。

昼ごはん

サイキョウメシ

午後はジグシアターのフカさんに呼ばれてスピーカー設置のお手伝いをしに行った。

去年の夏頃から京都芸術センターで舞台の仕込みやバラシ、美術の展覧会の搬入搬出などの補助をしているため、DMX線の配線事情はよく理解できた。二日に一度温泉に入ることになっているので（できたら毎日温泉に入りたい）早く終わらせる気持ちで手伝った。天井裏に入り込みなんとか完了。

フカさんとバイバイしてフベン宅に戻る。

りょうじは什器制作。晩に林さんの家で南インドカレーを食べるので、あみこはカレーの付け合わせを作ってくれた。

私は一人で待望の温泉に入りに行った。

今回行ったのは湯梨浜町にある養生館、明治5年に、倉吉市の豪農であった山榎直好^{やまのすなおよし}が泉源を発見し、別荘を築いた。のちに村民の養生の場として開放し、旅館として利用できるようになったかなり歴史深い近代温泉らしい。露天風呂と室内大浴場の二箇所あり、露天風呂に先に入った。

夕暮れ時の一人独占して入る露天風呂は最高だった。

シャワーが一つしかなく、水圧があまりにも弱すぎたため室内大浴場に移動。

室内大浴場のシャワーもなかなかお湯が出なかったので、お湯が出るシャワーを探し出し、頭を洗った。

古道具屋さん、がふのエイちゃんがフベン宅に来ていて、少し挨拶した。

夜は林さんというペインターの方の家にお邪魔して、林さんのご友人のカレー屋さんのカレーをいただいた。

夜ごはん

ハヤスサンありがとう

林さんの飼い犬、おむすびはフレンチブルドッグでかなり元気ハツラツだった。

りょうじは人の家にお邪魔する時いつもがっしりとした網カゴの中にコーヒーセットと必要なものを持って出かける。がっしりとしすぎて持ち手が握れないので、持ち手同士に棒を渡して持っている。りょうじ特製の持ち手棒は、犬にとって大好物みたいで、ジャタニさんの家のおとうさんも、もちろん林さんの家のおむすびも自分の物のように奪ってかじっていた。

「あーーーーっ！！」女性の奇声だと思い、少し焦る。

奇声をあげたのはあみこでも、林さんでもなく、おむすびだった。

かじりどころが悪く、喉に当たって、びっくりして叫んだようだった。

笑いが止まらなくなった。真剣な話をしている中でも、おむすびの叫び声が脳裏に染み付いて離れず、震えながら、笑いを我慢しながら会話をした。林さんは最近鳥取に越してきた。そのため自分の家を少し案内してくれた。

「ここはすごく日が当たるから、洗濯物をここで干している。」

窓を開けると周辺に背の高い家がなくて、日が当たる良い家だった。

おむすびも一緒に二足立ちして窓を眺め始め、「ブッ」と屁をこいた。

犬じゃなくて中に面白いおじさんが入っているのではないかと疑った。

眠りにつく前、おむすびのことを思い出して、くすくすと笑いながら寝た。







2月23日

8時30分起床。隣の布団を見るとあみこもりょうじもいなかった。

あみこは窯づめをして、本焼きを始めた。何点か釉薬を付けた陶器と私とあみこが掘ってきた粘土を入れている。

りょうじが作っているフードコートの什器の納品日は明日だ。

窯を見つつ、二人はあくせく作っていた。

昨日の夜フレンチトーストを朝に作ろうと決めていたので、私は薪ストーブに火を起こし、フレンチトーストを用意する。あみこはフレンチトーストにテンションが上がっていた。

朝ごはん

フフフレトー

食べ終え、あみこに「ミミちゃん一緒に祭具作ろうや」と誘われる。

りょうじは26日に祭具を作るワークショップを開催する。そのため「祭具を作って欲しい」と言われていた。

あみこは小さな陶器をたくさん用意して、針金で結び始めた。

私は祭具のプランが見えていなかったので祭具の絵を描き始めた。

ミミが寝ているところを採寸して、ミミを包むための祭具を作ることを決めた。でも今は作れないと判断して、絵だけ描いて終える。また今度、京都に戻ったら作り始めようと思った。

あみこ私は、窯の温度を見つつ手を動かして、りょうじは造作をしている。

家は寒いが、この時間はすごく貴重だと思った。

お昼は、^{えんちようえん}燕趙園で買ったシエンタン（中国の塩卵）にしようという話になり、私は中華粥を作り始めた。

あみこはたくさん米を入れ始めた。私は中華粥なのだからと、あみこが米を入れる度に水を足した。

八角やネギ、生姜、山椒など、体の温まりそうなものをとにかくたくさん入れた。「たらふく食べたい」と言うあみこに「米を入れすぎだ」と注意してもなお入れるので、尋常じゃない量ができた。完食するか心配だったが、見事完食した。すごく美味しかった。家でも作りたい。

昼ごはん

シェンタンピアン

午後からたくさん雪が降ってきた。夜は北海道という回転寿司に行こうと話していたので、私は雪かきをした。窯の温度も無事 1240 度まで上がり、りょうじもフードコートの準備を終えた。あとは買い出しをしたら完了するという。買い出しに出た矢先りょうじの車が家の真ん前でスタッグした。あみこが助けてりょうじは買い出しに出て行った。りょうじとは後で、北海道で合流する。窯の火を消し、出発した。こんな大雪の日に北海道で寿司を食べる人なんていないのだろう。いつもだったらお客さんが並んでいるという北海道も店内にお客さんがそんなにいなかった。たらふく寿司を食べた。なんならデザートも食べた。

夜ごはん

ありがとう北海道

満足してフベン宅に戻る帰り道、案の定スタッグした。りょうじの車も、私のレンタカーも。2、3回くらいスタッグしただろうか。スタッグする度に必死に車の周りを雪かきした。たらふく食べた寿司が口から出そうになりながら、雪をかき、無事に駐車。この滞在期間のほぼ半分は、溶けたら消えてなくなる雪に翻弄ほんろうされている。

しかし手が6つあると雪かきのスピードも違う。体がほかほかになったので、家に戻ってすぐにビールを開けた。





2月24日

8時30分起床。隣の布団を見ると二人ともいない。

りょうじとあみこはフードコートの準備をしていた。

10時くらいまでかかりきりで作業していたので朝ごはんは無し。その代わり、倉吉に11時に行き、夜長カレーを食べに行った。ピリヤニがとてつもなく美味しかった。あみこが食べていたバターチキンカレーはすごくまろやかだった。薫さんに会いに2度、鳥取に来たことがあるのだが、2度とも夜長カレーを食べていたことを思い出した。汗をかきながら、美味しいとむしゃぶりついていたことを、味覚を通して思い出す。

昼ごはん

夜は長くない！

りょうじはフードコートの什器を納品しに倉吉パープルタウンへ向かう。

私とあみこは鳴り石の浜へ向かった。実はこの滞在にして初めての自然観光をした。

鳴り石の浜の石は全て丸かった。大山^{だいせん}が出来る約2万年前の噴火活動よりもっと前、約100万年前の噴火でできた火山岩、輝石安山岩が波の侵食により丸くなって行った。キメの細かい安山岩なので、大きく欠けたり、ヒビが入る事もなく、長い時間の海の侵食により、綺麗な円形になっていったという。

この石はごろた石と呼ばれる。波の動きに合わせて、石が動き、「ゴロゴロゴロ」と音を出す。

あみこは鳴り石の浜の奥にどンドンと進む。

帰るの大変だろうなと思いながらあみこのあとを追いかける。

天気良かった。あみこは石を積み上げ始める。

私はこの石の中で一番光り輝いている石を探した。

できるだけ左右対称な、美しいと思える曲線を描いている石を探した。

気づいたらあみこは昼寝をしていた。

あみこのお腹の上に、3つの石を乗せて、一番美しい石を選び、手に持った。

「濡れてる石が好きなん？」と聞かれる

「一番光り輝いている石を探しているんだよ」と答える

自然観光を終え、近くにある塩谷^{しおたにていこう}定好写真記念館に行く。

「ベス単のフードはずし」と呼ばれるソフトフォーカスが塩谷の写真の特徴らしい。この時代の写真団体は少しオタクらしさがあるなと思った。写真は印象派の絵のように柔らかかった。

湯梨浜町に戻る途中、道の駅大栄にて停車。

3月、京都でインストールの仕事を受け持ったので、オンラインでの打ち合わせに参加した。あみこには申し訳ないことをした。思ったより打ち合わせに時間がかかり、ハクセンでお茶をする時間が削られた。ハクセンに向かう。テイクアウトでコーヒーを買った。店内の販売物を見てみると、この滞在中に訪れたみんなの家に絶対に置いてある食器用スポンジが売ってあった。

「あのさ、みんなこのスポンジ持ってるよね？なんでなん？」とあみこに聞くと「ミミちゃんよう見てんなあ〜！」と言われた。店員さんは「このスポンジ、めっちゃ良いんですよ！」とオススメしてきた。「じゃあ、」とスポンジを手に持ち、買う。

夕暮れ時、あみこと温泉に向かう。千年亭に行った。
露天風呂は東郷湖のすぐそばに付けられていて、すごく気持ちよかった。

温泉から出たタイミングでりょうじから晩御飯にしようと連絡が入る。
りょうじの作っていたフードコートの什器は増本さんというアーティストの作品で、増本さんと、企画者のジャタニさんと焼肉に行くことになった。

りょうじはやっと仕事を終えたと、一安心して、大ジョッキのビールを飲んだ。
タンが美味かった。タンってなんでこんなに美味しいんだろう。タン大好き。

夜ごはん
大人たちと焼肉

増本さんは京都に住んでいるアーティストだとりょうじに紹介される。
増本さんに、「なぜ鳥取に、フベンの家に滞在したのか」と聞かれる。
先日までの違和感を払拭するために、自分なりの言葉で正直に答えた。
生活費を稼ぐために必死で働いていること、少し疲れたこと、フベンの生活が豊かに見えたこと。
「そりゃ、京都から出た方がいいよ。」と増本さんに言われる。
そりゃそうだ。でもどこに住む？となった時に、実家をすぐに思い返す。
「秋田いいじゃん、アーツセンターとか、仕事もありそうだし」

フベンの生活は、りょうじがたみで働いていることで生活費を賄っているそうだが、
3月いっぱいでもみをやめるといふ。
りょうじは「どっちも働かなくなるかもね」と言い放つ。

りょうじはたらふくビールを飲んで満足したようで、早めに眠りについた。

私は密やかに、薪ストーブの残り火で鳴り石の浜で拾ってきた石を温めて、
布団の中に入れ、握りながら眠った。





2月25日

薪ストーブに火を起こしながら、「なんか、療養してる感じやわ」と独り言を漏らす。

あみこは「療養？」と聞き返す。

「うん、すごくゆっくりしてるし、癒されてる。」

「ほんなら良かった。」

昨日に引き続き、鳴り石の浜の石をストーブの上に温めていたらりょうじが「なにこれ！」と食いついた。「あったかいよ。」と温めた石を渡すと、「あちち」となりながら温かい石を撫で回した。「すごい、石の懐炉、石こ炉じゃん、、、！めっちゃ良い！」と絶賛する。

朝ごはん

白線の贈り物

午前中は焼き上がった陶器の撮影大会。ついでに3人の記念写真を撮った。

晴れている時の雪はすごく白い。雪を背景に撮影する。

ミミが外に出た。ミミは雪の上を寒そうに歩く。2時間くらい外に出たところで近寄ってくる。

ミミを持ち上げると、いつも嫌がって逃げるのに、この時だけは落ち着いた。

「ミミ、足寒かったんやろ。」ミミの足を温めながら抱いた。

あみこは地元の結婚式に参加するため、今日大阪に戻る。

鳥取市からバスに乗るため、鳥取市内でお昼ご飯を食べることにした。

necco70に行く。りょうじの食べていた鶏肉のクリーム煮がすごく美味しかった。

昼ごはん

あなどるなかれ！

ご飯を食べ、鳥取県立博物館に向かった。

旅は道連れ、滞在期間中に学芸員のマホさんと赤井さんに出会ったので、博物館に着くタイミングでマホさんに連絡してチケットを貰った。こばやかわしゅうせい小早川秋聲の日本画はすごく美しかった。

りょうじは夜にたみでバイトがあるので、途中で湯梨浜町に戻った。

大阪に行くバスの時間を待つ間、あみこは私はイトウでお茶をした。珈琲豆も買った。

あみこは森の生活者でバスの中で食べるベーグルを買う。

夜長カレーの人が、鳥取駅に蟹の形をしたお弁当が売っていると教えてくれたので、売店を見るも売り切れていた。むちゃくちゃショックだった。あみこを見送った。

りょうじが「たみに来ていいよ」と言っていたのでたみに行くと、今日宿泊するお客さんが来ていた。兵庫に住んでいる編集者の岩淵さんいわぶちと出会う。少しおしゃべりをした。話しているとフカさんとミーナツ家族がたみにやって来た。岩淵さんにご飯をするらしい。岩淵さんは、ジグシアターで映画を観るために兵庫から鳥取に来たという。ミニシアターが大好きだと言っていた。

明日はジグシアターでりょうじとカナルタを観る予定。私が手伝った配線作業はセノートの音を聞くためだったので、カナルタでは聞けないのだが、手伝ったお礼として無料で映画を観させてくれることになった。

みんなに「また明日」と言いたみを出る。

夜は私の鳥取滞在最後の晚餐。「魚が食いたい」とりょうじに言って、塩鯖とモサエビ、鱈のあらを買った。モサエビの殻を剥いている最中、「わっ！」と叫びりょうじがモサエビを投げた。

「え？」「コイツ生きてる」「え、まじか。すごい・・・」

生きていくらい大丈夫だろうと思ってりょうじが離れたモサエビを拾い、殻を剥こうとするとモサエビはビクビクと動き出す。死んでいるモサエビは柔らかいが、生きているモサエビは硬い。怖くて剥けなかった。鱈のあら汁を作る予定だったので、あら汁の中にモサエビを投下することにした。1匹だけだと心もとないし、2匹、殻の剥いていないモサエビをあら汁の中に入れた。

晩ごはん

最後の晚餐、手が4本

料理に時間がかかった。やっぱり手が6本ないと遅い。

火もちゃんと見ていないと消えてしまうし、作業が多くなる。

でも、りょうじとあみこは私が来る前までそうして生活してきたんだ。

(不便な生活をしているんだなあ。)りょうじと2人になることによって実感する。

料理している最中、フライヤーデザインについてりょうじは悩んでいた。

「なんか、自分たちの手が入らないと納得できないんだよね」

申し訳ないことをしたのではないかと、思うのだが、展覧会をすとなると、展覧会までにしなければならぬ準備がある。広報、制作などの下準備だ。悩ませてしまうことに申し訳なくなりながらも、助成金も取っているし、時間は有限だという話をする。

それでもりょうじは悩んでいる。

私は正直なんでも良くなっていた。

だから「りょうじに任せる！」と言い、りょうじは「わかった」と言った。

ビールを飲みながら、りょうじと話す。

「悩んで欲しく無いというか、変に抱えて欲しく無い。抱えこまないことで、良いものができると思ってる。やりたくないことはやらないとか、りょうじたちがお風呂はお金かかるから使わないとか、僕たちには必要ないかなって思うこと。そういう様な、なくていいと思う選択の中から良い作品が生まれると私は信じてる。」と臭いことを垂らす。

りょうじは少し苦笑いしていた。







2月26日

ゆっくり起きた。

出る準備はある程度済ませていたが、手が4本だとパンケーキを作る手も遅い。タネは私が作った。2人分なので、半分の量にしたら卵の割合が高くなって、しっかりとした生地のパンケーキができた。

朝ごはん

ジャタニ印のパンケーキ

慌てて家を出る。ジグシアターは車で5分で、上映時間の5分前に出発した。

無事に間に合い、カナルタを観る。

面白かった、というか、身近に感じる映画だった。「ここに家を建てたらすごく良い家が
できるだろう」など、無い場所から作ることや、草木を摘んで薬にすることは、フベンらしい生活の1つに思えた。

私はパンフレットを買った。りょうじはサウンドトラックを買う。京都に来た時に聞かせてくれるらしい。すごく楽しみにしている。お昼近くなっていたので Librarie でお昼を食べる。

お昼ごはん

Librarie のサンドイッチとコーヒー

慌てて出たので、忘れ物をした。

フベン宅に戻り大事なフィルムカメラと三脚を取りに戻る。

ここからは少し遠出をする。京都の方向に戻りつつ、りょうじと岩井窯へ行き、展示を見て、山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館に行き、海岸で石拾いをするプランだ。私は旬の蟹を買って帰りたい気持ちでワクワクしていた。

岩井窯は陶芸家山本教行さんの開いている窯元で、耳の長い土鍋がすごく可愛かった。

私はもうフベンの家に帰らないが、耳が長いので持ちやすそうだし、薪ストーブにちょうど良さそうだと感じた。岩井窯には展示室があり、展示室の中にあり、展示台としても使っている家具は今まで見たことのないゴツゴツとした家具だった。とてもかっこよかった。

山本教行さんの小皿を2点買った。これに醤油を入れて刺身を食べたい。(蟹食べたい)と思いながら買った。

山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館に向かう。

その途中、肉のたむらで肉肉しいメンチカツを食べた。すぐくジャンキーだった。

大地の自然館の目的は粘質のある土がどこにあるか割り当てることが目的で、陶石となるカオリナイトや長石の出所を探した。湯梨浜町南側の山間は狙い所だと思った。種類の多い石は主に大谷海岸で取れているようだった。石拾いは大谷海岸に行くことになった。

海と大地の自然館の近くに、モトフサ美術館という個人美術館がある。

りょうじが「ここずっと気になってたんだよね、行ってみても良い？」と聞かれ、入ってみる。

この美術館は鳥取県岩美町出身の彫刻家岡野元房おかのもとふさによる個人美術館だ。一軒家の中に彼の作品が所狭しと展示されている。一階の展示室ではペインティングを、二階では陶彫などの立体作品が並んでいる。特に二階の作品が良く、ここ3年間の中で一番大きな衝撃を受けた。

モトフサ美術館で満足した後、大谷海岸へ向かう。

たしかに、いろんな種類の石が転がっていた。石をじっと見ながら、ゆっくり歩いた。私はいろんな種類の石がたくさん入っているアソート石を拾った。りょうじは石の懐炉、石こ炉になる石を探している様子だった。

一通り楽しんだ後、近くの道の駅に行き、蟹を買いに行ったが、蟹は売り切れていた。忘れていたのだが、今日は日曜日だ。残念に思いながら、塩サバなど、鳥取らしいお土産を買った。山中のみんなは喜んでくれるだろうか。

道の駅で解散。

帰り際、りょうじに、「なにが良くて、なにも決まってないのが良い。お金も助成金をもらって来てるのに、友達の家泊まって、展示会の場所が決まってるのに、展示の話を進めなかったのが、やばいけど、ある意味良かった。」と総評をもらう。

私は苦笑いをした。聞こえが悪いな、と思いながら、「そうだね。でも、そういうところから生まれる美術は絶対に良いものになると私は信じてるから。大丈夫。」と言い、進めている企画の必要な事項を何点か伝えてりょうじと別れる。

「それじゃ、また京都で。気をつけて！」

「うん、ミミちゃんも気をつけて」

帰り道、もうすっかり暗くなっていた。

展示について決めなければいけないことを考えながら帰った。

あとがき

私はこの滞在を経て、いつの間にか、りょうじが良いならいいか、と思うようになっていた。

もしかしたら展覧会らしくない展示になるかもしれない。

どうなるのか全然想像つかないけど、でも、それでもちっとも心配するつもりがないのは、なんでなんだろう。この日記は展示に向けて冊子を発表するため、VOUでの空間がどんな風になっているのか、わからない。座れる椅子はあるだろうか、私たちは会期中なにをしているんだろう。

唯一決まっているのは滞在の時の、手が6本あった生活を、展示空間に持って来ること。

2022年3月23日



2022年4月2日 初版第1刷発行

『手が6本ある生活』

著・編集・写真 | 村上美樹

ごはんの名付け | 毛利愛実子（※2月25日晚、26日朝昼は村上美樹）

本書の内容を無断で複製・転写することを禁じます。

© 手が6本ある生活 2022 Printed in Japan.

鳥取滞在中、出会った人たちに感謝します。

村上美樹とフベンの生活圏を広げる展示「手が6本」

展示期間：2022年4月2日（土）～4月10日（日）

展示場所：VOU/ 棒 〒600-8061 京都府京都市下京区筋屋町137

開場時間：13時～19時

閉場日：4月6日（水）・7日（木）

広報物（ハンコ）デザイン：堤拓也

協力：Arts Aid Kyoto

協力 | 京都市「Arts Aid KYOTO」補助事業

